高田好胤（たかだ こういん）

(1924年 (大正13年) 3月30日 - 1998年 (平成10年) 6月22日)

◆法相宗の僧侶。薬師寺 127 代管主。法相宗管長。

◆金堂、西塔など薬師寺の伽藍を復興し名物管長と呼ばれた。

心のことば－好胤詞花集－より

あなたの誕生日は、母親の菩難の日である

諸人よ思い知れかし己が身の
　　誕生の日は母苦難の日

読み人知らずの歌ですが、あなたの誕生日にぜひ思い出してください。誕生日というとみんなが祝福してくれるものだと思っています。プレゼントが不足だと文句をいったりもしますが、よく考えてみまずと奇妙な風習ではありませんか。感謝されるべきは生み育ててくださった両親のはずです。特に胎内に宿してくださった三十八週間、いわゆる十月十日の苦労、そして胎外に出る瞬間の母親の苦痛こそ思われるべきではないでしょうか。

強いばかりが女じやない

うなだれて叱られよりのよい女房

好きな川柳ですが、そういう女性は当今なかなかお目にかかれないように思われます。

人というものは誰でも長所と短所を合せ持っているもので、長所の部分を敬いあって暮らせば万事うまくゆくと思うのですが、どうもそうではない。無理に短所を深して批判する。互いに「見下げごっこ」をしようとしているように思われてなりません。

社長は社員を見下げ、社員は社員であんたが威張っていられるのもおれたちが働いてやってるからじやないかと見下げる。家に帰れば亭主は女房を見下げ、女房は亭主の留守にさんざん悪口をいう。それを聞いて子供は、親を見下げるということになります。しかし、客観的にいって家庭内においては現今は女性のほうにいろいろ問題があるように思われます。

『オバタリアン』という漫画が評判になり、漫才などでさかんに笑いの対象にされている中年女性ー一自己中心的で、妙に活動的で、周囲への配慮に欠けるという種族のことをいうらしいのですが、これなども「見上げる心」が欠如しているからだと思います。

満員電車で十センチほどの隙があればお尻をねじこんでくる。いったん坐れば前に老人が立っても満員電車に乗ってくるのが悪いのよとばかり断固として譲ろうとしない。そのくせ、二十メートルも離れたところにいる友達を船頭が客を呼ぶような大声で呼ぶ。

よく見る光景ですが、ある漫談家がそういう状況を面白おかしく語ったあと、

「こんなに悪口をいってもオバタリアンに文句をいわれたことがない。なぜか……」

それは、誰でも自分だけはオバタリアンでないと思っているからだそうです。自分のことは見えないのです。

お寺ではお堂の中では脱帽してもらうことになっていますが、それをいうと、「これは

アクセサリーだわよ」とくる。そういうものかとそのままにしておくと、修学旅行生は「おれたちには帽子脱がしといて、坊さんも女に甘いんだね」と軽蔑の眼で見られることになります。大体、お寺に来るのに帽子かアクセサリーか判断に困るようなややこしいものを頭に乗せて来てくれるなといいたいのです。

憂うべきことに信仰の世界にもそれに似たことがあります。自分の信じる宗教以外はすべて邪教だという。宗教のもっとも基本的な態度、資格を忘れている悲しい人々です。

仏教でもキリスト教でも天理教でも、同じ地下水を吸い上げても花はいろいろに咲くように、無我なる水の流れの中に、それぞれの宗教の花が咲くのです。祈る心に微塵も変りはないはずです。それが己れの宗教だけを正しいと強弁して他の宗教を誹謗したり、他人の信仰を邪教よばわりすることなどは宗教者として非なるもはなはだしきかぎりです。

女の賢いのと東の空の赤いのはなんにもならない

西の空が赤いときは鰯が捕れるが、東が赤いのは女の賢いのと同じでなんにもならない。こういうことをいうとすぐキッと睨まれそうな気がするのですが、だからこそこの言葉が真実をいいあてているといえるかもしれません。この場合の賢い女というのは知識や賢明さをまるで装身具のように体の外側に飾りたてている人のことです。

同じような意味の諺に「朝雨と女の腕まくり」というのがあります。朝雨はすぐ晴れるからたいしたことはないのです。同様に女の腕まくりもたいしたことはないのです。腕まくりはしないまでも、いまにもしそうなご婦人をよくお見かけします。しかし、女が凄んでみても本人が思っているほど効果はないのです。女の武器はほかにあります。

朝雨といえば、関西には「朝雨に驚く婿を持つな」という諺もあります。朝雨が降っているから仕事を休むような亭主はたいした男ではありません。そういう男を見分けられるのが本当の賢い女なのです。

子供が学校から親に相談すべき問題を三つ持ち帰ってきたとします。大抵の場合、近ごろの母親は快刀乱麻を断つがごとくに答を出す。子供のほうが心配して、

「それ、父ちゃんに相談せんかてええんか？」

「なにいうてんの。父ちゃんにはわからへん」

かくして子供の中にダメ親父の像が次第に形成されてゆくのです。

男は「亭主関白」で関白どまりでしかないが、女は「かかァ天下（殿下）」で殿下にまでおなりあそばします。ひょっとすると「山の神」になるのも夢ではないかもしれません。

ともかく、女性の本当の賢さ、強さは内に秘められたものだと思います。思いを内に抱く、思いを内に蓄える、それはまた忍ぶ心の強さでもありますが、その強さというのは決して表面にぎらぎらあらわれているものではありません。

それを伝統的な日本婦人像といってもいいかもしれませんが、一見たおやめふうに見える日本女性がいざというとき家を守り国を護ってきたということはいくらでもあることです。またそれは自己本位のものであってはなりません。母の愛は人類愛に繋がるものなのです。

子供が持って来た問題の三つのうち一つだけを残し、「これ、母ちゃんではとてもわからんわ。父ちゃんが帰ってきはったら聞いてみような。あんたはもう寝なはれ」という。翌朝にはちゃんと答えが出ている。

（うちの父ちゃん、やはり偉いんやなあ）
　かくして子供心の中に父親への信頼心が養われてゆくのです。
　こういうご婦人には男たるもの歯がたちません。知識どまりの賢アホにならないようにしましょう。強いばかりが女じゃない、忍ぶ強さが女の真の賢さなのです。

錆は鉄より出でて、鉄を滅ぼす

　錆は鉄の中から生じ、やがて鉄そのものを滅ぼします。お経の中のお言葉ですが、これが「身から出た錆」になります。欲は人の身から出て、その人を滅ぼすのです。それをほどほどに調節するのが人生の修練です。『大般涅槃経（だいはつねはんぎょう）』にはこうあります。
「弟子たちよ、これまでお前たちのために説いた私の教えの要は、心をおさめることである。欲を抑えて己れに克つためにつとめよ」

見てござる

「宗教とはなんでしょうか？」
素朴に言えば「見てござる」ということになるのではないか。

己れに克つ

『法句経（ほっくきょう）」に「千度戦場に出でて千人の敵に打ち勝つよりも、自分一人に打ち勝つ者こそ最上の強者なり」という一句がります。自分の中に巣くう邪悪な欲望に勝つことがいかにむつかしいかを説いてくださったもので、克己ということです。克己という文字はときに克巳と間違われますが、私どもの学生のころは「巳は上に、己には中に、己れは下に」と習いました。己れを下に置いて相手を立てるというのは無我の教えでもあります。
『論語』にも「己れを克（せ）めて礼に復するを仁となす」とあります。仁は『論語」では最高の徳目とされ、真心のこもった愛情の世界、仏教でいう慈悲の世界です。「子曰く、仁遠からんや、我れ仁を欲すればここに仁至る」とも説かれ、仁というのは遠くにあるのではなく、自分が仁でありたいと望んだとき、仁はその人のものとなります。道は近きにありです。これは『観無量寿経』の「いだいけよ、御射知らずや、阿弥陀仏はここを去ること遠からず」という言葉とも共通するのを感じます。
　お経の精神を底において『論語』を読みますといろいろな教えがいただけます。聖人の教えは説き方は異なっていても精神は変りません。同じ地下水を吸いながら、それぞれの花を咲かせているのです。己れの信じる宗教以外は認めないなどというのはとんでもないことです。
　ところで、「阿弥陀仏はここを去ること遠からず」といわれる一方、『阿弥陀経』には「ここより西方十万億土を過ぎて世界あり。名付けて極楽という。其土に仏あり。名付けて阿弥陀と号す」といって、阿弥陀佛は十万億土の彼方におられると語られます。さあ、本当はどちらなのでしょうか。

誰でも真実に極楽を求め、阿弥陀佛を願うなら阿弥陀佛はいまここに現れてくださいます。我れ仁を欲すれば斯に仁至る、です。しかし、そう願わない人にとっては阿弥陀佛は永遠に十万億土の彼方のものでしかなく、お逢いすることはできないのです。

ある人が地獄極楽を見物したいと思い、まず地獄へ行くと多勢の人々が円卓を囲んで食事をしていました。「地獄にもご馳走があるもんだなあ」と思いながら見ていたのですが、真ん中にご馳走が積まれてあるものですから普通の箸では届きません。そこで長めのお箸が配られましたが、長すぎて自分の口に食べ物を運べないのです。心急げば急ぐほど箸は卓上を交差し、ご馳走は散乱するばかりでした。

つぎに極楽へ行くと、そこでも卓を囲んで食事をしていました。お箸の長いのも変りません。だけど人々は自分のお箸で挟んだご馳走をそれぞれ他人さんの口に運んであげているではありませんか。そしてお互いに感謝し合いながら食事がはかどったといいます。

心の持ちようで地獄にも極楽にもなる人生です。「金貨の雨を浴びるとも、もろもろの欲に飽くことなし」と釈尊は教えますが、自分に克ち、欲望を調御する努力が必要です。

雲間を出でし月のごとし

人間には自己顕示欲というものがあるようです。同じことなら自分を大きく、偉く見せたいという欲望です。実力以上に大物に見られたい、評価をされたいと考えます。しかし、大きなことをやることが偉いとはかぎりません。それよりも、地味ではあってもなさねばならないことを黙々とやりつづけるということがはるかに尊いということはよくあることです。

人生とは繰り返すということです。電車の運転に飽きたからといって運転手さんがそれを放棄したら電車は動きません。繰り返しに耐えることが人生のカであり、それがやがて練磨になるのです。辛抱の木に宝が実るのです。辛抱を苦労と思わなくなったとき、お職人さんは名人の技を獲得することになるし、ビジネスマンは誰にもひけをとらないエキスパートになり、それがまた人と人との関係もなめらかにし、社会の舞台が回ります。

雲晴れてのちの光と思うなよ
もとより空に有明の月

雲がないときだけ月は輝いているのではありません。辛抱と努力があればこそ月を覆っていた雲を追い払うこともできたのです。雲間の月の教えは『阿含経』にもあります。

「先に犯せる己が悪業を、いまや善業をもて覆う人は、この世を照らすこと、あたかも雲間を出でし月の如し」というものです。たとえ悪いことをしても真面目に懺悔をし、その上で善業をほどこせば、あたかも雲間から出た煌々たる月のように悪業を消し去ってくれるのです。この『阿含経』の教えは人にそそのかされて百人の人を殺し、罪におののく青年に与えた釈尊の言葉です。

三界はこれみなわが有なり

これは『法華経』にある言葉です。
三界というのは人々が生死輪廻する三つの世界ーつまり欲界・色界・無色界をいいます。したがって、私たちの物質世界、精神世界のすべてのものが自分のものだというのが冒頭の言葉の意味です。といっても、人間の強欲ぶりを表現しているわけではなく、本来三界にはこれは誰々のものということはないのだということなのです。それを俺のもの、お前のものという意識があるから所有欲にとらわれ、こだわるのです。
こういう話があります。
昔、豊臣秀吉が可愛がっていた鳥が、あるとき鳥番の不注意で逃げてしまいました。なにしろお天下様の秀吉が可愛がっていた鳥ですから、どんな仕置きをうけるかわからない。命はないものと鳥番は覚悟をきめ、おそるおそる秀吉の前に伺候し、ことの次第を報告いたしました。すると秀吉はかんらからからと声高くうち笑ったといいます。
「いまや日本六十余州、みんなおれの庭なんだぞ。籠から飛び出した鳥はどこを飛んでいるかしらんが、いずれにしてもおれの庭のどこかで嬉々として囀っていることに変りはないんじゃ」
この「日本中がおれの庭」というのが「三界はわが有なり」ということであり、これは「空」なる心の働きにも通じます。
私たちはなかなかこういう境地に達することができません。大事な鳥なら籠の中に飼っている状態でしか”由分のもの”と意識することができません。それを他人が逃がせば怒ることになります。怒られたほうも「鳥の一羽くらいでケチケチしやがって」ということになり、あげくの果てに友情がヒビ割れるということにもなりかねません。

すべての人、すべての価値を受け入れる広い心を持ちたいものです。

朝（あした）に紅顔あって夕に白骨となる

蓮如上人のお言葉です。美しいものはうつろいやすい。若いと思っていても、いつ死が訪れるかわからない。だからこそ、今日いまというこの時間を大切にしなければならないという教えです。　→　諸行無常

マイナスをプラスに転化するのは努力次第で、すべてが移り変わってやまない世の中であるがゆえにこそ、努力のしがいがあるというものです。

あるべきようは

一休禅師が曲りくねった松の前に「この松を真っ直ぐに見た者には褒美をやる」という立札をたてたという話があります。
「こんな曲った松をどう見れば真っ直ぐ見えるのだろう？」

皆は頭をひねったり、下から覗いて見るのですが、曲った松が真っ直ぐに見えるわけがありません。中でただ一人、「この松はどう見ても曲っている！」といった男がいたのです。
一体禅師は男のところへ行き、「お前さんは素直にこの松を見てくれた。まことに嬉しい」
といって、その男に褒美を与えたといいます。人々は「あいつは曲がっているのを曲っているといっただけじゃないか！　それがどうして真っ直ぐ見たことになるのだ」とわめきましたが、禅師が期待していたのは曲っているものを曲って見るという素直な心で、それがものごとを一番真っ直ぐに見ていることになるのです。真っ直ぐなものを無理に曲げて解釈するようなことが、このごろ多すぎるような気がいたします。

個性は野性ではない

いまの時代は個性尊重とよくいわれます。生れたものをそのまま伸ばしてあげるのがなによりもの個性尊重だというのですが、本当にそうでしょうか？　生れたものをそのまま放置し、訓練もトレーニングもしないのが、果して個性尊重でしょうか？
訓練なきところに個性はなく、それは単なる野性にすぎません。いうなれば原石です。生れ持って来た個性を訓練し、トレーニングすることによってそれは磨かれ、よき個性として輝くのです。持って生れた個性がいいものだけならともかく、悪い個性も一緒に持って生れるのが私たちなのです。個性には伸ばしてあげなければならない個性もあれば、摘み取らなければならない個性もあることを知っておくべきです。
それを選別し、うまく剪定してあげるのが親や先生の勤めであり、躾や教育です。個性と野性を混同してはいけません。

かたよらない心、こだわらない心、とらわれない心。広く広く、もっと広く。それが『般若心経』、空の心なり

「般若心経』は図民のお経として広く親しまれ、佛前だけでなく、神前でも読誦されております。
正式には「般若波羅蜜多心経』ですが、その上に摩訶の二文字をかぶせる場合が多いようで、この摩詞は偉大、尊い、勝れているなどの意味を含みます。般若はプラジュニャー、またはパンニャがもともとの言葉で、智慧と訳されます。波羅蜜多はパーラーミッタの音写です。凡夫である私どもが住むこの此岸から憧れの理想境地である彼岸－聖者がお住いになる彼岸に行くための修行の完成を申します。この修行を実践しているお万が菩薩でありますし、その菩薩行を六つの徳目で説明したのが六波羅蜜です。
「般若心経』は約二百七十文字ですが、その中でもっとも人々に知られているのは「色即是空、空即是色」という言葉だと思われますが、この「空」ということが『般若心経』の教えの肝心であるといわれております。
それなら、「空」とはなんであるかということになるのですが、これはそう簡単に私どもごとき者が語ることはできません。第二の佛陀といわれ竜樹菩薩をはじめとして「空」

についてはいろいろな教説があり、なかなかむつかしいものですが、私はわかりやすく「かたよらない心、こだわらない心、とらわれない心。広く広く、もっと広く。それが般若心経」、空の心なり」といただかせてもらっております。これはあるとき私の口からすっとお出ましいただいた言葉で、私自身は佛様から授かったものだと思っています。

しかし、あまり「空」とはなんであろうかとかたより、こだわり、とらわれると、そのこと自体が「空」の精神から離れることになりかねません。

もともと「佛」は「はとける」に由来しているといわれ、束縛や偏見、こだわりから解放されることなのです。かたよらず、こだわらず、とらわれない心を持っておればこそ悟りは得られるのです。佛様のような大きな悟りを持つことは私たちにはなかなかむつかしいことですが、その佛様が「草木国土、悉皆佛性」と申しておられ、すべてのものが佛性を所有している、授かっているといわれています。その佛性に気づくことが自覚なのです。

雲はれてのちの光と思うなよ
　もとより空に有明の月

雲に覆われている己れの中のその月ー佛性を見つけるためには、かたよらない心にならなければなりません。こだわらない心にならなければなりません。とらわれない心にならなければなりません。

あるものは遠く、あるものは近く

人間は「万物の霊長」だといわれていますが、「万物の長」といわずに、なぜ霊長というのか、あらためて考えてほしいと思います。たとえば、泳ぐということについては人間は魚にかなわない。鳥のようには飛べない。匂いを嗅がしたら犬の敵ではない。ネズミ捕り競争では猫の勝ち。人間、いいところがありません。

それどころか、大抵の動物は夜でもものを見ることができるのに、人間は昼でも眼鏡のやっかいになっている。私も四十歳を過ぎたころから老眼が始りました。そういうと、ある人が「先生、いっぺんこれをかけてみなさい」というので、その人の老眼鏡をかけてみたら、よく見える。まるで別世界のように明るく見えたのです。

「これ、上等な眼鏡ですな？」

「いえ、どこにもある普通の老眼鏡です」

それまで自分は老眼だなどとは思ってもいなかっただけに、まさに青天の霹靂でした。いまでは悲しいことに老眼鏡は肌身離さずということになっております。

このように人間は肉体的には動物よりも劣っています。それを精袖でおぎなっているために霊長といっているわけでしょう。「霊」とは魂であり、心です。鳥よりも高く早く飛ぶ飛行機を考え、馬に負けない自動車をつくり、夜でも明るい電燈を考えた。ところが、物質文明が発達してくると、それらが霊長たる精神の所産であることを忘れ、物を物としてしか考えず、ついには自分たちがつくりだした物質の氾濫で滅亡の危機に瀕しているのです。まさに「物で栄えて心で滅ぶ」です。

だが、よくしたもので、眼が遠くなったころ、今度は夜のトイレが近くなったのです。冬の夜などかならず起きるようになりましたが、あれは難儀なものです。とくに大和の、それも寺の夜は深々と冷える。誰が起きてやるものか、と頑張ってはみるものの、ついに

は頭が痛くなり、睡眠不足ということになりかねません。
　と、あるとき、私は気がついたのです。眼が遠くなる、やがて耳も遠くなる、ついには気も遠くなるだろう。なにもかも遠くなるのは可哀そうだから、せめてトイレくらい近くしてくださったのは佛様のお慈悲なのではあるまいか。あるものは遠く、あるものは近く――こうして全体のバランスをとってくださっているのではあるまいか。
私たちの住んでいるこの此岸と呼ばれる世界に対し、佛の世界を彼岸といいますが、この彼岸は、かたよらず、こだわらず、とらわれない中道の世界です。お彼岸の日が昼夜同じ時間の季節にあるのはそのためです。佛教の教えはそのように中道なる心へのお導きです。あるものは遠く、あるものは近く、と私は受けとらせてもらっています。ものは考えようなのです。

シワとシワを合せて幸せになる

　合掌についてはいろいろな説明があると思いますが、合掌したときの指一本一本はそれぞれ一つの心、「一心」ということをあらわしています。十本の指で私たちの心の中には十の世界があることになり、それを「一心十界」といっています。
　その心の中の十の世界というのは、①地獄界　②餓鬼界　③畜生界　④修羅界　⑤人間界　⑥天上界　⑦声聞界　⑧縁覚界　⑨菩薩界　⑲佛界で、この十の世界を誰でも持っています。もっとも哀れなる状態である地獄界から最高の状態である佛界まで、誰でもが心の中で持っているのです。お経にも「同じ水を飲んでも牛はそれを乳にし、蛇はそれを毒にする」という訓えもありますが、心がけ次第で私たちは地獄にも落ちるし、佛になることもできるのです。つまり、十本の指は「一心十界」を象徴しており、その心を一つに合せるというのが合掌の意味だといわれています。
　また、こうもいわれています。一方の手は自分であり、もう一方は相手をあらわしており、それを合せることで、自分と他人を分けへだてをしないという「自他平等」の精神を象徴しているのです。
　あるいは、「浄穢不二（じょうえふに）」をあらわしているともいわれます。インドでは右手が清浄、左手は汚れているという考え方があり、左手でものを人に渡すのは礼儀に反するといわれます。しかし本来、あれは綺麗、これは汚いとはじめから差別するのは正しいことではありません。人の心同様にたゆまない努力で汚いものでもやがて綺麗なものにすることはできるのです。
その左右の掌を合せ、両者は平等であるというのが合掌の教えであります。佛教は平等を説く教えです。
　また、ゴロ合せみたいで恐縮ですが、両掌にあるシワとシワが合されて「シアワセ」になるとも申します。これがテレビのコマーシャルで使われ始めましたが、幸せを幸せと思う心のお育てをお願いいたします。幸せを当り前のこととして気づかないでいると、とり返しのつかない悲劇に陥ることになります。身近なところで、食事のあと「ごちそうさま」と合掌する習慣が日常的にできれば結構なことだと思います。
　ある落語で聞いたことですが、合掌した掌を口のところへ持って行くと「叶」という形になる。だから、合掌すると思いが叶うのだそうです。

過ぎし世のいかなる罪のむくいぞや
　合す掌もなきわれぞ悲しき
両手両足をなくされた中村久子さんのお歌です。中村さんは合す掌こそなくされましたが、合す心をおいただきになっておられました。私どもは合す掌がありながら、それを安易に考えて合す心を失っています。もったいないことです。

共業（ぐうごう）の所感

人間は業を積み重ねて生きていますが、個人の業とはべつに会社とか家族、ときには同じ国家に属する人が共通して持っている業があります。それを共業の所感といいます。その典型が環境汚染や公害で、これは地域社会、国、あるいは人類全体の業の結果です。
「ないがましかよ、気が楽な」というところにまで至れば悟りの境地というべきですが、悲しいかな、凡夫たるもの、なかなかそうはいきません。その結果、家族単位や会社単位で、あるいは学校単位で共業を重ねるということになります。
薬師寺金堂復興には台湾の檜を用材として使わせてもらいました。できれば、日本の木を使いたかったのですが、もう日本でそれだけの檜を用だてることはできなかったのです。各執事に担当を受け持ってもらったのですが、用材は生駒昌胤（いこましょういん）という昭和四年生れの執事が担当でした。そのため、生駒執事は宮大工の達人といわれ、文化功労者の栄にも浴した西岡常一棟梁と何度も台湾へ足を運んでいました。
私も樹を育ててくれた台湾の天の神、地の御霊にお礼をするため報恩謝徳法要に幾度となく彼の地を訪れました。また、いただくだけではいけませんから、吉野杉の苗木を持参し、植樹法要もさせていただきました。台湾から樹を買っていく商社などは多いが、謝徳法要や植樹法要をしたのは薬師寺さんだけだと、当時世話になった孫海大人がいってくださいましたが、樹をいただいてそれを環境汚染にするかどうかは、そのへんの心がけにあるような気がいたします。
何度目かに台湾を訪れたときのことです。
「生駒さんは本当に大和心のある人です」と孫海さんがつぎのような話をしてくれました。

生駒執事は西岡棟梁と一緒に檜の山へ行くわけですが、まず棟梁が一本一本樹を吟味して選び、それに生駒君がしるしをつけてゆきます。そのあとで生駒君はしるしをつけた樹にお線香を立て、蝋燭をともし、「尊いお命をいただかしてもらいます。けれど、あらためて佛さまのお堂に生れ変っていただきます。それまでしばらくのあいだ、お命をあずからしてください」といって一本一本の樹に『般若心経」をあげていたというのです。
私はすっかり嬉しくなって、寺へ帰るとさっそく彼を呼び、「ありがとう」と心からお礼をいいました。すると彼は「そんなこと、当り前のことでっしゃろ」とまことに無愛想な返事でした。味もそっけもありません。生駒という男はそういう素朴な愛すべき人物でした。
その彼が昭和六十三年、数え六十歳の若さで亡くなりました。冥福を祈るとともに、天地自然の恵みをいただくときは、せめて彼ほどの敬いの心を持ってもらいたいものだと思っています。